



# Glorious



高槻 綱

# 01.唄うように

---

下校の時間を告げるメロディが、まるでわたしたちを追い出そうとするみたいに鳴り響く。時刻は午後六時。わたしは広げていたお菓子を手早くかたづけて、ビニール袋に押し込んだ。窓の外は群青。そろそろ月が見える時間だ。わたしはビニール袋と鞆を持ち、美月の綺麗な茶髪をひとなでして言った。

「かえろっか」

「うん」

笑顔でうなづく美月は、くっつけていた机を元の位置に戻す。わたしも、教室の照明を消そうと扉の脇へむかった。がたがた、という音が止んでから、ぱちり、と照明を消す。追い出しのメロディは、まだ響いている。わたしたちはそのメロディに抵抗するみたいに、わざとゆっくりと廊下を歩いた。さんざんふたりで話したのに、まだ話題があふれてくる。校門を出るときにはすでに音も鳴り止んで、ふたりの耳に届くのは互いの声だけになっていた。

「涼香」

「なに、美月」

「すきよ」

「わたしも」

「ずっと友達よ」

「うん…ずっとね」

名前を呼び合って、笑いあってじゃれあって、まるで双子みたいだって、誰かに言われたことがある気がする。美月のお母さんだったかな。ほんとにそうならよかったのになって、何度思っただろう。苗字が一緒でも、遠い親戚だからってそれだけ。多分、高校を卒業して離れ離れになったら、もう会うこともない、美月。

(わたしの、唯一の宝物)

どちらからともなく手をつなぐと、美月もわたしもちょっと照れて、ひとつになった影だけがわたしたちの後ろで伸びていた。

これがしあわせだった頃のさいごの思い出。

---

わたしはいつも、彼女とのあの約束をわすれられずにいる。

## 02.しらず痛んだ

ガシャンとおおげさな音をたてて転がったのは、美月の椅子だった。ひどい、ひどい、この子がなにをしたって言うのよ、ふざけないでよ。あやまんないよ。あんたたちにこの子を傷つけていい権利なんてないんだから。あやまんないってば、今すぐ、あやまれ！

「もういいよ、涼香」

「みづ、き」

でもあんた今すごく傷ついた顔してる。すごく無理してる顔してる。ねえ、いいんだよ。わたしにだけは素直になってよ。どうして強がるのよ。全部嘘なんでしょう、言いがかりなんでしょう、だったら言い返せばいいじゃない。耐える必要なんてこれっぽっちもないよ。怒りなさいよ、ふざけないでって言えばいいじゃない。

「だって、涼香の前では、素直な私でいたいから」

(どういう意味)

(それは、どういう意味なの?)

「美月」

ごめんねと、言ったかもしれない。もしかしたらさよならだったかも。どうして、とも聞こえた気がする。美月はほろりと涙を流しながら、漫画みたいに教室をでて行った。残されたわたしと、その他大勢。それでも、なんにもなかったみたいにはなしはじめるクラスメイトにいらだって、わたしはちょっとだけ手荒に美月の椅子を戻した。何人かの視線が集まったけれど、気にしない。今は昼休みだということも忘れてしまおう。

「帰る」

荷物をまとめて、美月と同じように教室を飛びだした。ううん、全然ちがう。わたしは美月みたいに、傷ついていない。あんなに、無意識に震えてしまうほど傷ついてなんかない。ただ裏切られたと思っているだけ。あの、教室に。クラスメイト達に。

『単位の為に化学の長谷川と寝たんだって?』

『涼香の前では、素直な私で』

(馬鹿なんだから、あの子は!)

走って走って、走りながらずっとごめんと思った。わたしがあの子を追いつめたのだ。そんなつもりじゃなくて、ただわたしは無神経に美月を傷つけたあいつらが許せなかつただけなのに。無神経はわたしだったのだろうか。

「ごめんね、美月…！」

見つけたその背を抱きしめても、美月は、泣き続けるだけだった。声も出さずに、体だけ震わせて、まるでわたしを拒絶するみたいに、背をむけたまま。

気づけなかった彼女の痛みは、わたしをも痛めつける。

### 03.愛になげく

---

美月がいなくなったのは、長谷川先生との一件が公になった直後だった。

長谷川先生は書類送検されてうちの学校を辞めた。そのことは報道もされて、一週間くらい、校門の前ではかかさずキャスターさんがインタビューをしていた。あのおとき教室にいた何人もの野次馬がインタビューに好き勝手答えているのを、わたしはテレビの前で聞きながら、続けて依然行方不明中であるという美月の報道に、目を伏せた。

《美月、今どこにいますか。テレビ見えますか。どうか家にだけでも、連絡を入れてあげてください》

かしかし、と親指がボタンを打つ。これで、何回目だろう。送信履歴には同じ内容のメールが何件も何件も落ちている。わたしはため息と一緒にメールの本文を全消去した。そうしていつも美月を撫でていたように携帯をやさしく撫でる。いち、いちいち、さんさん、よんよんよんよん、きゅうきゅうきゅう。

《あ い し て る》

(なんて。そう伝えたところで、何が変わるっていうの)

ふう、とため息と同時に、玄関の開く音と買い物袋の音がした。ただいま、と疲れた声。お母さんだ。そうして今日の晩御飯のことなんかを考え始める私はとても薄情で、でも、普通だと思った。そばにいない人間について永遠に考えていられるひとがいるなら教えてほしい。そんなの、できるわけがない。そうやって自分に言い訳しながらテレビのチャンネルをかえると、がさがさといろんなものを買い物袋から冷蔵庫に移しながら、お母さんが呟くように言った。

「美月ちゃん、まだ見つからないんだってね」

ちくりと胸が痛んで、息がうまくできない。携帯の画面はまだ、私の想いを綴ったまま。ぱちんと閉じても言葉は消えない。私はそのまま、携帯を今まで座っていたソファに置き去りにしてお母さんの手伝いをすることにした。シンクに出ている材料を見る限り、今夜はカレーらしい。ご飯をいつもより一合多く炊くように言われたから、きっと美月のご両親もまた一緒にご飯を食べるんだろうなと思った。

確信も持たず、手放しのままだった愛が鎖になって私の心臓を縛りあげるようになったのは、美月が行方不明であるとわかった次の日だった。わたしは美月がいなくなったその日、不思議なくらいに自分と美月を信じていたから。ふたりの絆を信じていたから。美月はわたしに黙っていなくなったりしないって、必ず連絡があるって信じていたから。だけどどれだけ待っても美月からの連絡はなくて、わたしは、自分の愚かさのうちひしがれて。次の日朝の光にさらされた部屋の中で、ただ、泣いた。

彼女はわたしが思っているほど、わたしを信頼してはいなかった。

わたしはこんなにも彼女を愛しているのに、彼女はわたしのことなど、かえりみてはくれなかったのだ。

---

悲しいのは、失踪ではなく彼女にとってわたしがその程度の存在だったこと

## 04.あなたの声を

---

美月からメールが届いた。行方不明と報道されてから、三週間経った頃だった。

《ごめんね》

そんな言葉を待っていたわけじゃない。ずきずきとところが痛む音がした。彼女はその一言ですべてをすませるつもりなのだろうか。それならば、ひきとめなければ。

それでも、わたしのころはずっと彼女のことを責めていた。わたしを置いていった彼女のことを。だからやさしい言葉が見つからなくて、返信ができなくて。迷ったすえに押した通話ボタンは、びるりと電子音を鳴らしながらわたしと美月をつなぐ。

「みづ、き？」

「涼香」

「げ、元気...なの？ どうして帰ってこないの？」

「うん」

「どうして、すぐ連絡くれなかったの」

「言うと思った」

「どうして...。美月、は、わたしを...（信じてなかったの？）」

傷ついているかもしれない。だからやさしくしてあげなくちゃ。電子音を聞いている間はちゃんとそう思えたのに、久々に美月の声を聞くともう、我慢ができなかった。積み重なった傷が、あふれて。

彼女は少し黙ってから、ごめんね、とささやいた。酷くやさしい声だった。わたしはわたしが、その声によって癒されていくのを感じた。そして、こんなにも美月を好きだったことも、知った。

「今どこにいるの」

「先生の実家」

「先生って...長谷川先生？」

「そう」

「なんで」

「ごめん」

「わたしは、謝罪が聞きたいわけじゃないよ」

「うん...今から会おうか、涼香」

日はすでに、落ちかけている。待ち合わせは、学校から少しはなれた駅の改札口。明日もまた学校だとか、お母さんやおばさんに連絡だとか、そんなのはもうすべて後回しにしてわたしは部屋を飛び出した。

だって、愛するひとと会えるのは、これで最後かもしれないと思ったから。

（ああ、美月はとっくにわたしからはなれてしまっていたんだ）

がたんがたん。ゆっくり揺れる電車の中で、わたしはこっそり、少しだけ泣いた。

---

その響きを、わたしではない誰かが支えているのだとしたら

## 05. さよならの月

改札で携帯をいじっていたら、足元に見知った靴が見えた。でも、顔をあげると知っているのは靴だけで、その服も長い髪を結っているゴムも、すべてわたしの知らないものだった。「美月」、とその名前を呼べば、やさしく笑う彼女。

高校を卒業したら離れ離れだと思っていた彼女は、高校を卒業する前にわたしの知らないひとになってしまっていた。本当に双子だったらよかったのに。そうしたら、ずっと、自分の中に美月を見ていられた。それでも彼女が笑っているならそれでいい、と、複雑な心境の中こちらにも笑みを返す。美月は「行こう、」とわたしの手をとってそのまま、無言でぐんぐんとわたしの知らない町を進んで行った。何度も角を曲がり、たどり着いた先は小さなアパート。そこの二階の一室へ、チャイムもなしにその身をすべりこませわたしを引っ張った。知らない町。知らないアパート。知らない部屋。そんななか、美月までもわたしの知らない人のようで、わたしはしばらく玄関から動けなかった。

「涼香」

名前を呼ばれて、ようやく靴を脱ぐ。

まっすぐ居間に続くフローリング。もしかしたら先生もそのご両親もいるのかもしれない、時間も時間だし、と時計を確認しながら思っていたけれど、果たして誰の姿もなかった。ほっとしたような残念なような気持ちになる。わたしのところは今日すごく忙しい。

美月はわたしにふたりがけのソファへ座るよう言って、紅茶の用意を始めた。かちゃかちゃとカップやポットが音をたてる。ここが美月の家だったら、こんなこと当たり前なのに、先生の家だと思うとどうしても緊張してしまった。しばらくして紅茶が目の前に出されると、わたしはお礼を言いながらそのカップに手を伸ばす。

「ごめんね、無理やり連れてきて。連絡も、なかなかできなくて」

「ううん...いいの。大変だったのは、美月だから」

そう言いながら、ようやく落ち着いてきた自分の気持ちに自分で安堵した。

彼女も私と同じにカップを手に取りながら、淡々と話を続ける。

「本当は、すぐに連絡をしようと思ったの」

「うん」

「でもね、急にこわくなっちゃって」

「なにが」

「涼香に軽蔑されるのが...嫌われて、しまうのが」

「そんな、こと」

「でもね、思い出したの。涼香が私を一生懸命かばってくれたあの日。あの日、涼香は私を何も言わずにぎゅうって抱いてくれた。あったかかった。いっぱい、問い詰められるべきことはあったのに、

涼香は何も聞かなかった。やさしかった。だから、信じたかった」

横を向けば、美月と目が合う。「信じたかった」、だからメールくれたの？ 「こわかった」、だからあのメールにあんなに時間がかかったの？

(信じたかった...それは、わたしもだ)

「...わたしはあのとき、美月に拒絶されたと、思った」

「え？」

「背中を向けて、声を殺している美月はわたしなんかと目を合わせたくないんだって」

「そんな、こと！」

「うん。よかった、勘違いで」

心底ほっとして、自然に笑みがこぼれる。美月は「私は、」と言ったきり少し俯いた。また何かかなしんでいるのかと、心配になってその頬に触れようとする、逆に彼女の白くて綺麗な手がわたしの頬を包んだ。そしてそのまま、

わたしは美月を愛していた。もしかしたら、美月もわたしを愛していた？

触れてすぐはなれた唇は、その答えを何も教えてくれなかった。ただ、彼女には今先生がいる。長谷川先生はわたしの知るところからすれば、やさしくて誠実な男の人だ（だから、先生が美月を、なんて信じられなかった）。

(わたしと一緒にいるよりも、先生と一緒にいたほうがきっと未来がある)

そっと触れたその手を、一度だけぎゅうとにぎりしめた。もう、視線は合わせない。わたしは俯いて、一言だけつぶやいた。

「ずっと、友達よ」

美月も、わたしの手をわずかに握り返して言う。

「うん...ずっとね」

そうしてわたしたちは、さよならをした。両親にはこれから連絡を入れる、と言っていたので、わたしも安心して帰ることにする。いざとなったら、わたしも一緒に説得するよ、と約束をした。

そしてもうひとつ、約束。電車に揺られながら、わたしは携帯のアドレス帳を開く。

わたしは、多くのメールと一緒にそこにある美月の名前を、削除、した。

(さようなら、わたしの宝物)

月は空高くあって、暗い夜をやさしく照らしていた。きっとこの携帯からあなたが消えても、わたしはずっと忘れないだろうなあなんて、最後に見た彼女の笑顔を思い出しながら思った。

---

そうしてわたしの恋は、ひとしれず終わってしまったのでした

## Glorious

あなたのそばにあれば時間がわたしのすべてでした

<http://p.booklog.jp/book/46293>

著者：高槻 綱

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/prxge/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/46293>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/46293>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.